

スヴァーリとの独占インタビュー（４）

——ヴァチカンにおける子供の生贄

【訳者解説】これは、同じスヴァーリとのインタビューでも、（１）～（３）とは別の質問者によるラジオ・インタビューである。原文はもっと長いが、特に幼児生贄の部分だけを抜き出した。

ヴァチカンで行われているサタン崇拝の話は、インターネット上ではかなり前からあったが、これだけ詳しい口頭によるショッキングな暴露は、これが初めてではないだろうか？内容が、信頼されているスヴァーリの実体験であることによって、ヴァチカンの逃げ場がいよいよなくなった。ぎょっとするのは、儀式の終わりに参加者が、New World Order に対する死ぬまでの忠誠を誓わせられるところである（p. 6）。これは、父ブッシュ大統領をはじめ、多くの有力政治家がこぞって公的に口にしているから、ヴァチカンとイルミナティと米政府の３者が、共通の黒い影の下につながっていることを示している。問題は、世界を支えていた柱が倒れかけても、何ひとつ変わらないかのように振舞うメディアである——その間にも、子供の虐待と生贄は続く。

January 21, 2015

Svali (偽名) とのこのインタビューは、調査ジャーナリストで、イルミナティ研究家の *Greg Szymanski* によって行われた。残念なことに、グレッグは 2013 年 8 月下旬以来、消息不明である。グレッグはその当時、この“強烈な”ラジオ・ショーを再放送しようとしていた。ところが突然、公衆の前から姿を消した。*Catholic Church/ Illuminati Insiders* における彼の大量の記事とインタビューは、[このリンク](#)に収録されている。

<https://web.archive.org/web/20080831235857/http://www.arcticbeacon.com/>

またこのリンクを訪問すると、多くの他の人々による、同じような人間の生贄の証言が出てくる。スヴァーリの証言に続いて、アルゼンチンでの法王の忌まわしい経歴に非常に詳しい、ミシェル・チョスドフスキー教授による、法王フランシスの否定できない暴露を載せた。法王フランシスは、長く予期されていた“ニセ預言者”で、反キリストであるバラク・オバマと組むことになるだろうと、多くの人が今では考えている。やがて起こるオバマの暗殺と、黙示録 13 にある、奇跡的な頭の傷の回復に注目すべきである。

<http://revelation12.ca/?p=1373>

GS：オーケー、戻ってきました。今、8分過ぎです。これからイルミナティ、“家族”、結社の内部へ深く潜入しようと思います。ゲストとしてお迎えしているのは、この集団に生まれ、30年以上もそこに巻き込まれていた方で、彼女の名前はスヴァーリです。スヴァーリ、ここにいますか？

SV：はい、いますよ。

GS：おいでいただいて有難うございます。あなたがラジオ・インタビューをなさらないことは知っています。だから本当に感謝します。これによってアメリカの民衆が、あなたの生まれたこの秘密組織のことを、本当に理解できると思うからです。そこで早速この問題に入っていこうと思うのですが——あなたはこの集団の内部で生まれたわけですね、豊かなご両親から。そこであなたの子供時代の、この集団内部のトレーニングからまず話していただき、それから、ヴァチカンでのあなたのオリエンテーション（方向付け指導）に入っていたきたいのです。どうぞ。

SV：（驚いて笑いながら）おやまあ、それはかなり幅広い話になりますね、グレッグ。それは何時間もかかりますよ、私の言う意味がわかってもらえるなら。

GS：はい、わかっていますが、もしここでそれが可能でしたら、我々のために。

SV：はあ、いや、私は生まれつきこの集団の中の者で、ドイツで生まれました。そして幼い時にアメリカへ来ました。私は基本的に、この集団のすべての者が通り抜けるトレーニングを…役割に応じて程度の差はありますが、受けました。

ティーン・エイジャーになると、私は若者のリーダーになり、22歳までにサンディエゴの指導者会議の若いメンバーになりました。その頃はヘッド・トレーナーで、私は6番目のトレーナーでしたが、最後には2番目のポジションに上がりました。

12歳のときでした。私はあなたに前に言ったような、ヴァチカンでの儀式で…

GS：そうでした。

SV：これは実は、集団のすべての指導者が、どの時点かで強制されることなのです。

GS: ところで基本的に言って、あなたはごく幼い時にアメリカに移住して、私の記憶では、幼い時から刷り込まれたということですね。あなたは非常に裕福な家庭に生まれたと…

SV: そうです。

GS: あなたはアメリカへ移ってから、ごく若い年齢で、あなたは特別の存在で、“選ばれた”者だと言われた。そうでしたね？

SV: ええそれは、この集団のすべての者が、特別で選ばれた者だと言われるのです。それはもっと成長してから、私をととても冷笑的にならせたことの一つです。イルミナティに属する者で、お前は特別だと言われるか、または長期のプログラムを受けない者はいないのです。彼らはいわゆる“家族”で、物事をやれる唯一の者なんです。

ですが、はいそうです、私はいつか“家族”のために、偉大なことを成し遂げるだろうと言われました。私が客観的に見て、ある程度優れていたのは、集団での自分の役割を知っていたからです。それはかなり多くの他の者を越えることでした。だから私が、集団内で特別扱いや役割を与えられたのは、そう言われていたからでなく、私のおこなったことによつてだと思います。

(「私のおこなったこと」というところで悔いるように声を下げる。)

GS: それで、あなたは12歳になったときに、ご両親からヴァチカンでのある就任儀式に行くように言われたのですね。

SV: そうです。

GS: あなたがそこへ行ったとき、それがどのように起こったのか、儀式で何が起こったのか教えてもらえますか？

SV: (ため息、声が緊張する) よろしい、うん、これは話しにくいのです、ご存知のように。

私が12歳のとき、飛行機でドイツへ行かされました。私はそこに着いて、“ドイツの神父たちの家”と言っておきますが、そこへ行きました。それから数日間、あらかじめ、特定の準備があり、私はある非常に重要な儀式があるのだと言われました。そしてそれはその時点では、封印の儀式だと考えられていました。そして基本的に、その儀式の間に、私が何をしたらよいのかを、少しだけ教えられました。

我々がそこに着いたとき、我々はヴァチカンを通って行きました。ヴァチカンの地下に、私たちが前に話したときあなたに説明した、大きな部屋があります。その部屋へは、13 のカタコンベの部屋が通じています。それで、どうするかというと、その部屋へ行くには階段を下りていくのですが、それが円形だとわかります。だからそれら全部が丸くなっているのです。彼らはカタコンベからミイラを運んできました。そしてそれらを(13 のカタコンベの?) それぞれの脇に置きました。そして「これは儀式を見守ってくれる神父たちの霊なのだ」と説明しました。

儀式の間、部屋の真ん中に大きなテーブルがありました。それは表面が巨大な金色の五角形になっていました。そこで儀式が行われました。

GS：それで、何人の子供が、他に何人の子供たちが、このいわゆる家族あるいは結社の任命を受けるために来ていたのですか？

SV：その時点では、他に2人の子供がいました。しかし大人も何人かいました。

GS：なるほど。

SV：いいですか、教会もまた、忠誠を誓わせるために、大人を連れてくるということを知っておいてください。私の聞いた話では、本当かどうかは知りませんが、カトリック教会の位階制の中である地位に上がろうと思えば、やはりこの儀式を絶対に受けなければならぬようです。

GS：なるほど、それであなたはこの部屋に下りてきて、…ご両親もそこにおられた？

SV：いえいえ。ドイツ人の神父と、フランス人の神父はいました。

GS：なるほど。それでその時点で、あなたは何を目撃したのかを、聴取者の皆さんに説明してあげてください。

SV：(沈黙、さらに声を緊張させて) ええ、テーブルがありました。それは部屋の真ん中に黒いガラスが置いてあるようでした。それは石で作ったものですが、とても光沢があつて黒く見えました。黒曜石かオニキス(縞瑪瑙)のようなものだったかもしれません、わかりません。こういう石は、このとき以外に見たことがありません。

その隅（複数）には金色の溝がつけられています。液体を集めるものです、お分かりでしょう。小さな男の子が、テーブルの真ん中に置かれていました、麻薬を与えられて——。私は、この子は麻薬を与えられていたと思います。とても静かだったからです。彼は動かず、何も言いませんでした。

GS：それは3歳か4歳の男の子ですね？

SV：そう、その通りです。

GS：それから彼らは、子供の生贄儀式を続けた…。

SV：はい、その通り。それは前にあなたに話しました、確かに。

GS：そこで、その後ですが… 本当に、何という信じられない経験でしょうか、まだ12歳の子供にとって。それが起こったとき、心の中はどうでしたか？

SV：恐怖でした。まったく戦慄としか言えません。私、私、私は、人がそんな経験をしたときに感ずる恐怖を、口で言うことはできません。

GS：それであなたは、これが行われているときに、彼らが言っていた言葉を覚えているのですか？

SV：（沈黙）その男は赤い服を着ていました。彼はラテン語で喋りました。基本的にはこういうことです——「きょうこの日、どうぞ生贄をお受け取りください。」そしてこう言いました、「この生贄をもって儀式を封印します。」そして彼はそのようにしました。

そのときも、あまりの恐怖だったので…（ため息）あなたは、自分の心は駆け回っているのに、何もすることができない、という状況に置かれたことがありますか？ いわばそこに座っているだけで、もうろうとして気が遠くなるような？

GS：まあ、子供のときに怖かった経験はありますが、そこまでのことは…

SV：（さえぎって）ないでしょう、ええ。

GS：あなたのようなことは経験したことはありません。

SV：あなたの心臓の鼓動が、220 まで上がったと想像してみてください。動けません。震えているのですが、それを見せないようにしているのです。

GS：うーん。

SV：戦慄でした。実は、心の中で考えていたのは、「私はこれが終わるまで待てない、待てない」ということでした。これを口で言うのではありませんが、心の中で繰り返すのです、「これが終わるまで待てない、終わるまで待てない、終わるまで待てない」。

GS：うーん。

SV：その後で、赤い衣装の男が来て、手に巨大な黄金の指輪をはめているのが見えました。彼は部屋の中央まで来ました。その日に誓いを立てる者は一人ひとり、前へ出て、彼の前にひざまずき、彼の指輪にキスをして、万人のための「新しい秩序」、**New World Order** に対する、死ぬまでの忠誠を誓わねばならないのです。

GS：フム、そこで、その時点であなたは、エスコートされて外へ出た…。

SV：そう、そうです、儀式がすべて終わった後です。私の言うのは、他の人々も誓いを立ててからということです。彼らも同じ義務がありましたから。

GS：そして、彼らもあなたと同年だったのですか？

SV：2 人の子供はそうでした。しかし 3 人の大人たちもやはり、前へ出て、同じことをしていました。そしてその後で、我々はこのように言われました、(ゆっくりと、正確に)「万一この誓いを破る者があれば、同じことか、もっと悪いことが、その者に起こりますように」。(May the same to you or worse occur should you ever break the oath !)

GS：フム、ではこれは基本的に… ヒュー、何ということだ、その年齢で何が… そしてあなたには、これは全く不意だったのでしょうか？ あなたは儀式があると言われていたが、あなたの話から判断したところでは、こんなことは予想していなかった。

SV：これにずっと耐えるのはとても困難でした。その部屋の、何かのしかかられるような、恐ろしい感じは、これまでに経験がなかったからです。私はイルミナティの内部で、これまでに何度か儀式の経験はありますが (それはよくあるのです)、しかし、これは私の経験では最悪のものだったと言わねばなりません。その理由は… その部屋にあった暗さの

量を私は説明できないのです。それはただ、純粋な悪でした。そして、そこにいた人でなければ…ひとりの人を見ていなければ… それは純粋に恐ろしいものでした。

(訳者：「ひとりの人」を GS は追及していないが、これは特別の人であろう。)

そこで起こったことだけではないのです。何かといえば、その時の、のしかかる感じなのです。そして今、私はクリスチャンになって、この重苦しい悪が臨在するのか、喜びと平和である神の愛が臨在するのか、その違いがよく分かります。それは、あの部屋にあったものとは正確に対立するものです。

GS：ところで、私がこのことについて、非常に面白いと思っていることがあります。25年ほど前のことですが、私はローマで、フリーランスの記者をして物を書きながら、6年過ごしました。私はヴァチカンを何度も何度も、何百回も通り抜けました。私は法王の演説とか、そういったものを取材していたのです。

私がそこにいた期間は、ヴァチカンのスキャンダルの期間で、教会銀行とか、その他のこと…イルミナティのメンバーとか、フリーメイソンなどを巻き込むものでした。Maria Ventdital という女性が私に近づいてきたことがあり、私はこれを決して忘れません。ローマは小さな街です。人々は、私が秘密結社とか、そういうものの取材をしていることを知っていました。人々に聞く必要があったのです。

で、この女性が近づいてきて、同じような話を私にしてくれました。彼女はあなたほど気丈ではありませんでした。なぜなら、泣き出さずにはその話ができなかったからです。この人はイルミナティを抜け出すことができなかったので、2度自殺を試みたそうです。彼女は北イタリアの非常に裕福な家に生まれた、生まれながらのメンバーでした。彼女も、自分に起こった基本的に同じ儀式の話をしました。

それで、あなたへのインタビューが始まったとき、私は、それをあなたや聴取者に話そうと思ったのです——25年前にマリアという女性から、また、私が話した数人のイタリアの人たちから聞いたことを。私は実は、私の安全のためだと思いますが、それがあった場所も、どう起こったのかも教えてもらえませんでした。

しかし再び、スヴァーリ、あなたの話が、25年前に私の聞いた話の傍証になっています。では、いったん休憩したあとで、イルミナティを今は脱出して安全な、あるメンバーの信じられない話に戻りたいと思います、Republic Broadcasting Network です。

[コマーシャル・ブレイク——再開 23 : 15]

GS：オーケー、「調査ジャーナル」に戻りました。私はホストのグレッグ・シマンスキーです。私たちは、30年間、“家族”、結社、イルミナティのメンバーだった、スヴァーリさんと話しています。

スヴァーリ、あなたは任命式が終わってから、神父の一人と、ヴァチカンの中庭へ歩き出したのだと思います。そのとき彼は何と言いましたか？

SV：その時点で、彼は、決して忘れるなどだけ言いました。彼は、儀式のあいだ、私は立派に振舞った、泣き叫びもせず、気絶とか、そんなことは何もなかった、と言いました。彼は「お前はとてもよくやった」と言って、満足気でした。それから我々は、近くの家滞留しましたが、私はその家の人たちを知らませんでした。我々はその晩そこで泊まって、ドイツへ帰りました。

GS：オーケー、そしてその儀式のあいだ、他の人たちはどうでしたか？ どんなふうに自分を処していましたか、覚えていますか？

SV：(ため息) それについて言いたいのは、残念ながら、私はあまりに… あなたがそんな状況に置かれたとき、あなたが絶対に考えないのは、他の人たちはどうしているだろう、ということですよ (笑う)。私はただ、自分を見失わないように必死でした。わかっているのは、誰も金切り声をあげるとか、叫ぶとかいったことはなかったことです。みんな静かにしていました。「死の沈黙」というべきでしょう。話しかけられたとき、または指輪にキスをするために前へ呼ばれたとき以外は。

GS：オーケー、では次の問題に進みましょう…